

# 3つの基本技術励行で収量UP！

～にんじん収量低減要因はこれで解決！？～

対象：京極町北岡・中野地区にんじん作付農業者3戸 活動期間：令和3～7年度 本所地域第1係

## 活動の背景

北岡・中野地区は倶知安町と京極町の境に位置し、畑作野菜複合経営が主である。にんじんは他地区と比べて収量が低く、地域の農業者も問題視している。過去にJAと共同で実施した実態調査では以下の3点が収量低減要因となっている。そのため、改善案を重点地域の3戸に提案した。

### 背景

- ①他地区より収量が低い
- ②原因究明の為の実態調査をJAと実施（R1～R2）

### 収量低下要因

- ①作土層が浅い
- ②出芽率が低い
- ③キタネグサレセンチュウ頭数が多い

### 対応策

- ①サブソイラの適正施工
- ②は種深度のばらつき改善
- ③緑肥導入によるキタネグサレセンチュウ害低減

## 活動と成果のポイント

### 1 サブソイラの適正施工

#### 提案内容

心土破碎の施工深を耕盤層にサブソイラの刃が当たるよう変更

#### 実施戸数

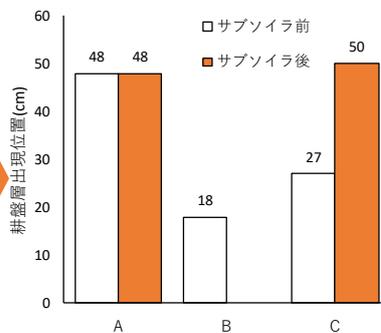
サブソイラの適正施工は3戸が実施！

#### 結果

作土層30cm以上確保！（2戸）

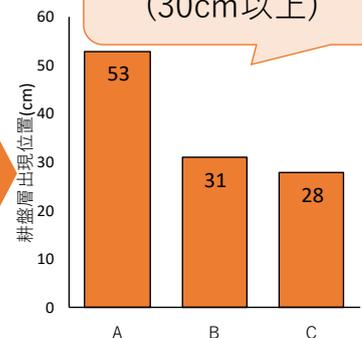


心土破碎前と後に農業者と土壌硬度確認



#### 成果

有効土層の確保 (30cm以上)



サブソイラの適正施工を3戸が実施（B氏は聞き取り）

C氏ではサブソイラ+プラウ施工からは種時の耕起作業まで3週間空いてしまい、土壌が硬くなってしまった

### 2 出芽安定対策

#### 提案内容

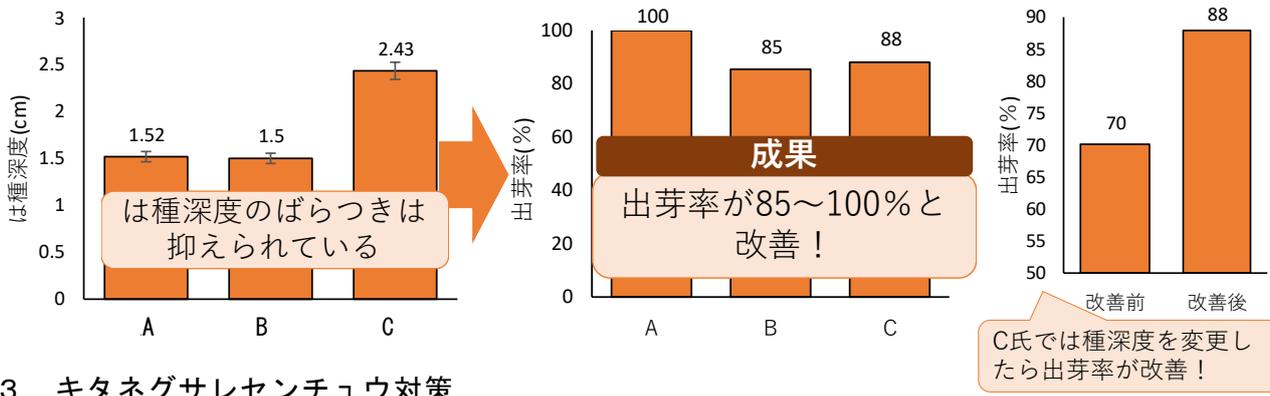
- ・農業者自身によるは種深度確認
- ・深度を適正值に変更

#### 実施戸数

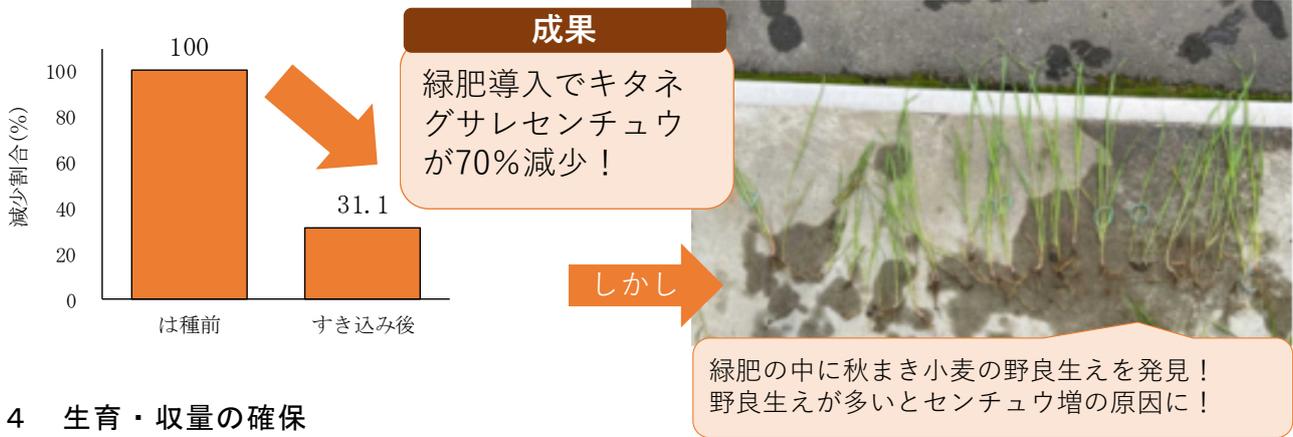
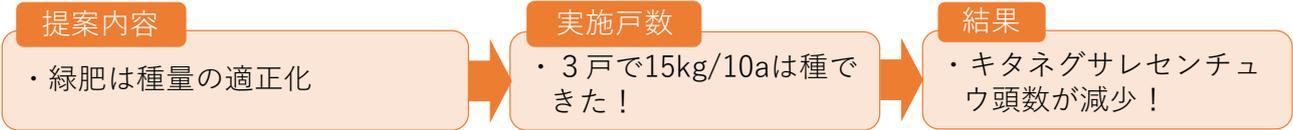
- ・は種深度の確認は3戸が実施！
- ・1戸では種作業中に改善！

#### 結果

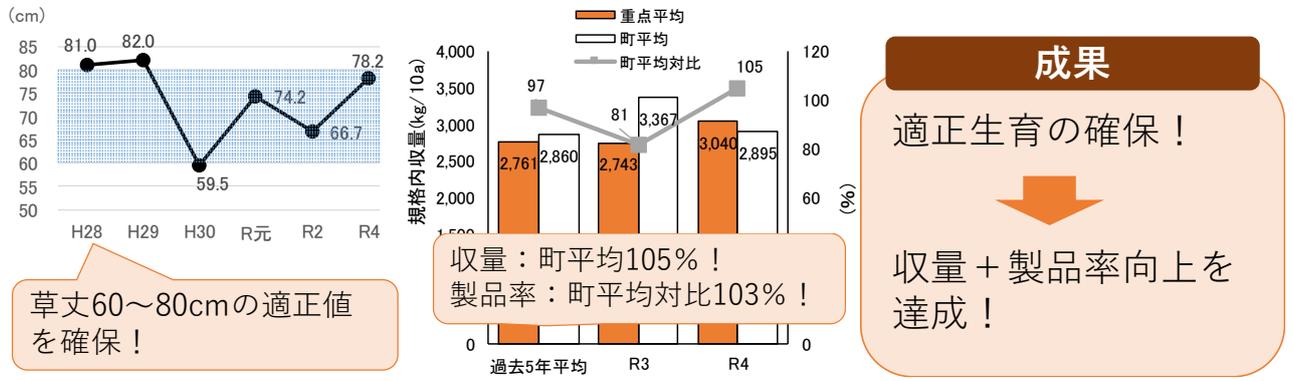
- ・は種深度のばらつき抑制！
- ・出芽率改善！



### 3 キタネグサレセンチュウ対策



### 4 生育・収量の確保



#### ～農業者の声～

- ・は種深度を調整したことで出芽率が向上して良かった。
- ・ばれいしょ後なので硬いと思っていたが、やはり硬かった。サブソイラやプラウで改善可能だが、秋まき小麦後の作付けも検討したい。



### 今後の対応

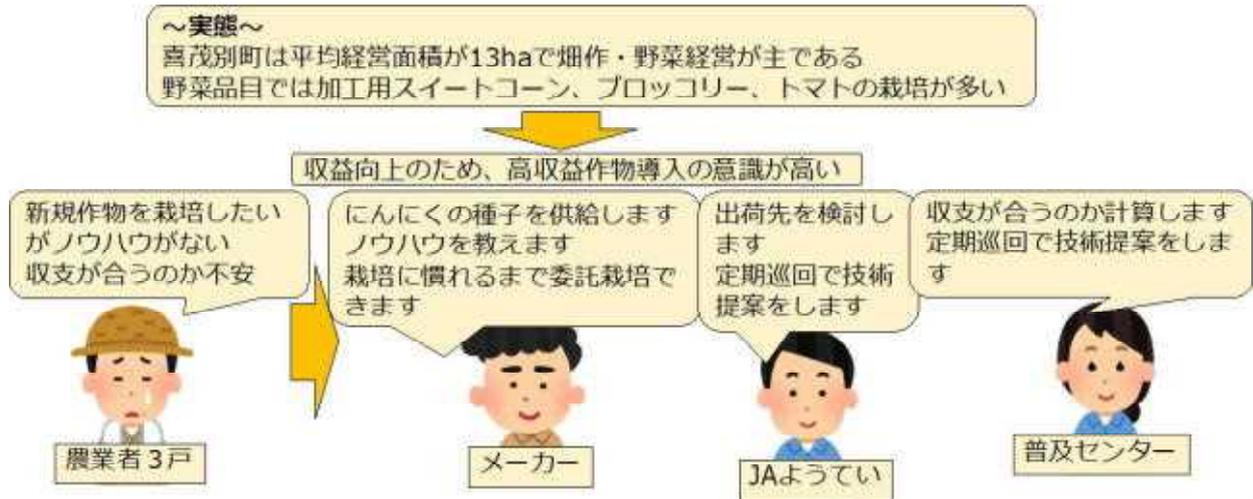
- 改善内容をJAようてい担当者と共有し、各種講習会等で周知する。
- ・は種時のばらつきは改善され、出芽率が向上した結果、出芽率が多いことによる変形や小根が多くなっている。適正な株間について検討する。
- ・緑肥の発芽安定対策を実施する。

# 新規作物で収益UP！

～にんにく栽培の現地事例整理と技術提案～

対象：喜茂別町にんにく作付け者3戸 活動期間：令和3年～令和4年度 本所地域第一係

## 活動の背景

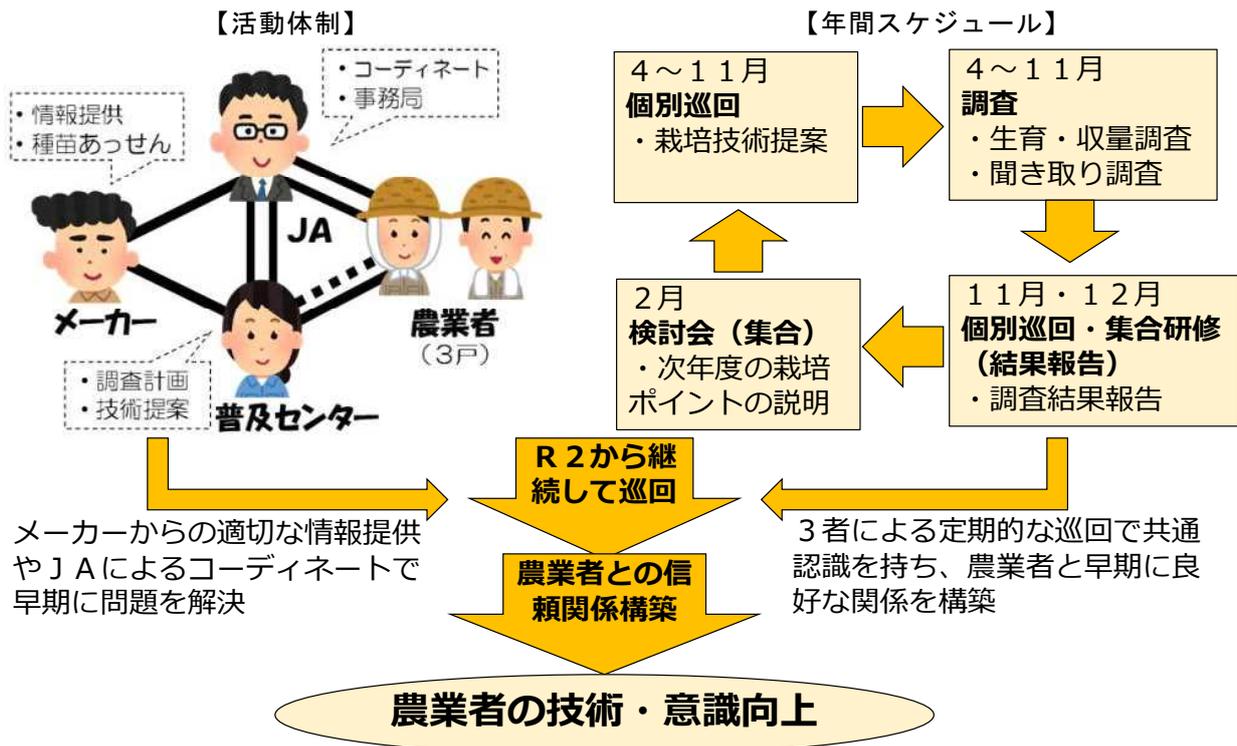


### 【活動のねらい】

新規作物として導入する適否の確認（収益性の整理）と適期防除の支援

## 活動と成果のポイント

### 1 活動方法



## 2 成果のまとめ

表1 令和4年栽培チェックリスト

栽培チェックポイント	基準	A	B	C
1 水はけの良いほ場で栽培する	水はけが良好	○	○	○
2 適正施肥	N : 18~25kg/10a	○	○	○
3 適期は種の実施	9月上旬までは種	○	○	○
4 栽植密度の適正化	12,720~18,390株/10a	○	○	○
5 雑草対策	雑草に覆われていない	○	○	○
6 春腐れ病対策	春腐れ病の防除を実施している	○	○	○
7 さび病対策	さび病の防除を実施している	○	○	○
8 摘蕾の実施	摘蕾を実施している	×※1	×※1	×※1
9 適期収穫	基盤が平らになってから収穫している	×※2	○	○
総合判断		○	○	○

各技術の重要性が理解された

※1 摘蕾の重要性が理解されていなかった  
 ※2 他作物との競合で収穫が早まった

表2 労働時間と収益性

労働時間 (h/10a)	収入 (円/10a)	収益 (円/10a)
226	777,194	405,239

喜茂別町での導入は可能！

懸念事項

- ・面積拡大に伴う労働時間増

植付機・収穫機の導入検討

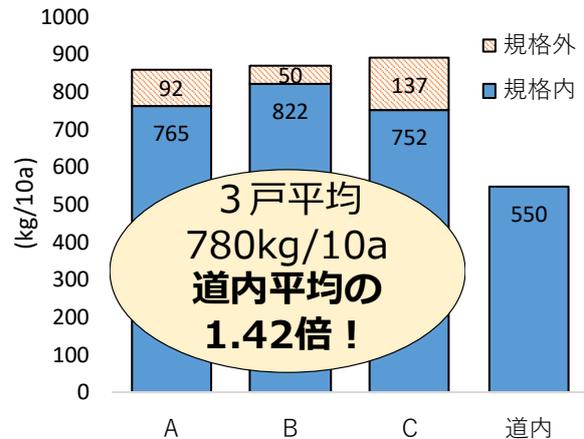


図1 令和4年産規格内収量

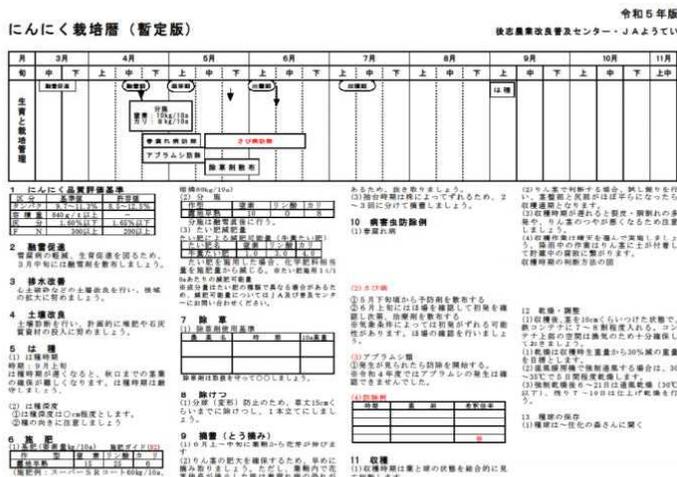


図2 にんにく栽培暦（暫定版）を作成

### ～農業者の声～

- ・詳しい人がいて巡回のたびに勉強になる
- ・令和2年から比べると作業が慣れてきた
- ・摘蕾を実施して変形をなくしていきたい
- ・少ない面積で手作業なので、良いにんにくを目指したい



農業者が主体的に栽培技術を検討し、選択できる

### 今後の対応

さび病の発生が多く、薬剤散布回数や農薬の選定が求められている。そのため、さび病の防除体系を確立させる。

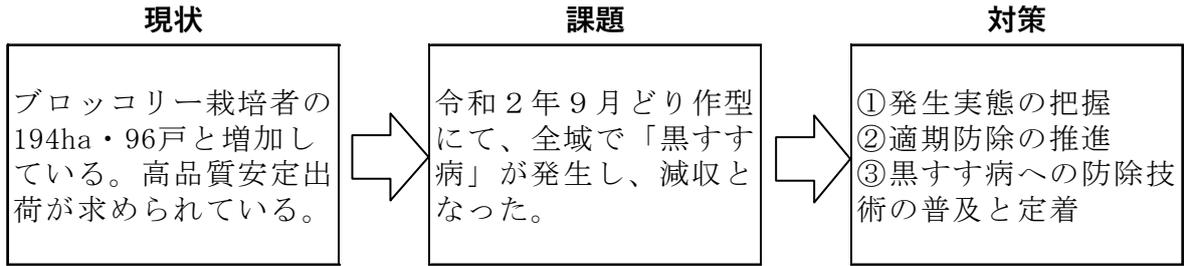
# ブロッコリー主要作型での黒すす病対策の確立

～適期2回の防除で製品率の向上へ～

対象：真狩村、ニセコ町、喜茂別町、倶知安町 ブロッコリー栽培者 8戸

活動期間：令和3～4年度 広域（園芸）

## 活動の背景



## 活動と成果のポイント

高品質安定生産のため、①発生実態の把握、②適期防除の推進、③黒すす病防除技術の普及と定着を3本柱として活動を実施。

### 1 発生実態の把握

4町村4ほ場（R3年は3地区、3ほ場）、2作型（8月どり、9月どり）で調査ほ設置し、黒すす病の発生実態の把握に務めた（写真1、2）。

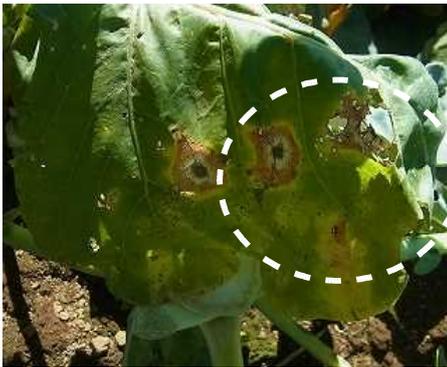


写真1 黒すす病の病斑



写真2 JA職員との発生調査

**適期に2回防除すれば、  
下位葉は発生するが、  
花蕾は未発生！**

表1 9月どり発生状況（発病度）

調査作型	定植30日前後		収穫直前		
	下位葉	下位葉	下位葉	下位葉	花蕾
R3年9月どり (3ほ場平均)	3.3	0.0	15.0	0.0	0.0
R4年9月どり (3ほ場平均)	3.8	0.0	25.0	0.0	0.0

**【成果1】 管内の初発時期と発生実態の把握！**

## 2 適期防除の推進

- (1) JA防除手引きに黒すす病の防除時期・使用薬剤の掲載(図1)
- (2) 発生時期前に技術情報の発信(図2)
- (3) 青空教室にて注意喚起(写真3)



写真3 青空教室にて注意喚起

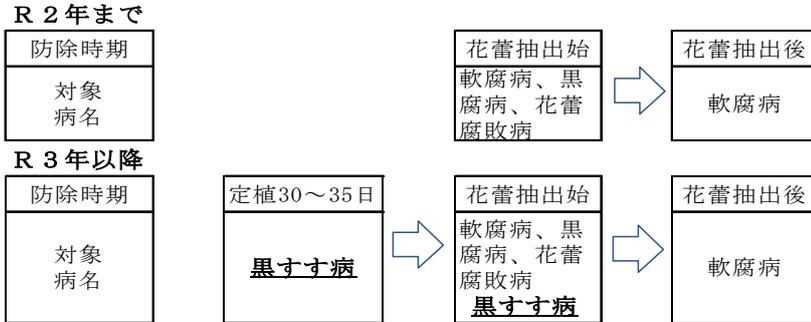


図1 適期防除の推進

**プロックリー**

令和4年8月農業技術情報 ようてい農業協同組合 後志農業改良普及センター

**9月収穫作型の「黒すす病」防除を!**

今後、高温(25℃以上)になる日が多くなることから、「黒すす病」による発生被害が予想されます。従って8月上旬から9月下旬に収穫する作型(6月下旬から8月上旬に定植した作型)は防除を徹底しましょう。

1. プロックリー-黒すす病

《病原》 *Alternaria brassicicola* 糸状菌(カビ)

《発生》 夏期の高温(25~31℃)、多湿時に発生が多く、胞子により空気伝染する。

《病徴》 葉には直径1~2cmの円形の淡褐色病斑、葉柄には紡錘形の病斑を形成し、花蕾にも黒い斑点を生じ花蕾全体がまだらに黒変する。

2. 推奨防除体系

定植30日後頃の1回目の散布と、その約2週間後の2回防除の体系を推奨します。

【花蕾形成始期】…圃場の30~40%の株が出蕾した日(1回目散布から約2週間後)

図2 技術情報の発信

### 【成果2】適期防除が地域に普及した

## 3 黒すす病への防除技術の普及と定着

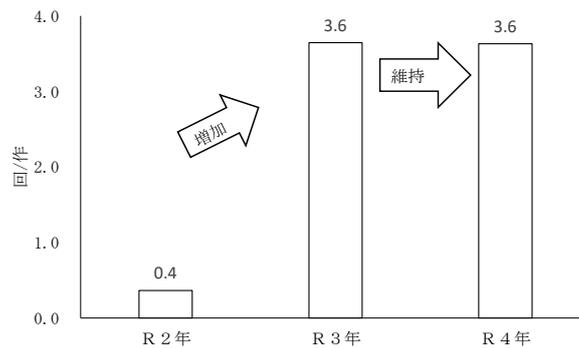


図3 防除技術の定着

**【成果3】  
防除回数  
の増加・定着**

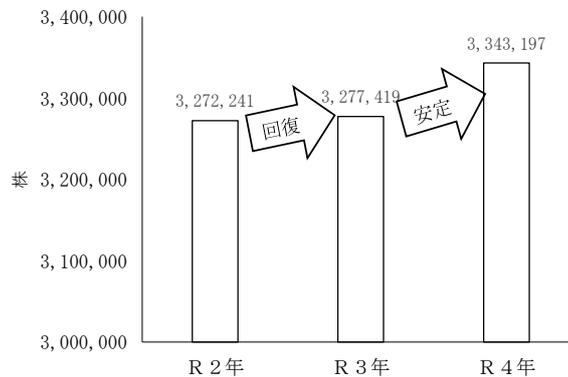


図4 収量の回復と安定生産

**【成果4】  
被害軽減と  
収量の増加**

## 今後の対応

黒すす病への適期に2回防除する技術が対象農業者及び地域農業者に波及され定着した。併せて、耕種的防除も習得されたため今後は一般的な活動で対応をする。

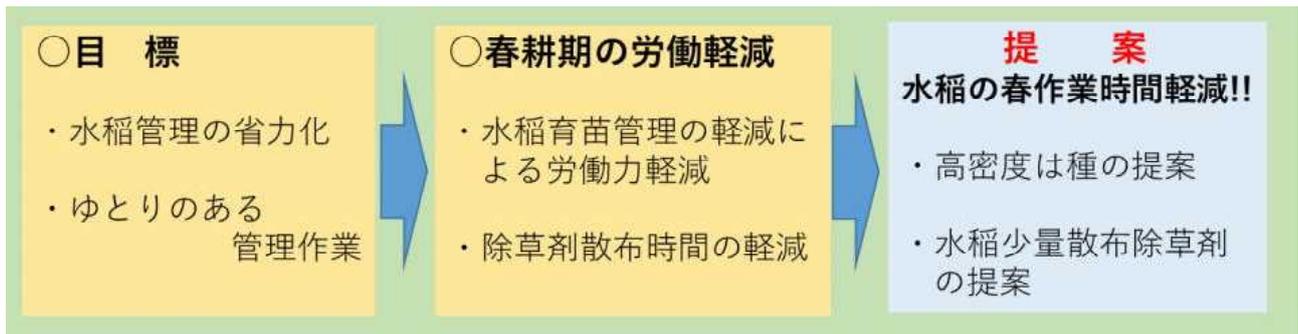
# 水稲省力栽培でゆとりある農業を実践!

～高密度は種、少量散布除草剤の使用で労働軽減～

対象：蘭越町水上地域4戸 活動期間：令和3～7年度 本所地域第二係

## 活動の背景

蘭越町は、水稲を基幹とした農業が主の地域である。しかし多くの農業者は水稲以外の作物の作付けがあり、労働力の軽減が求められている。そこで、主として作付けされている水稲の省力化に向けた技術提案を行った。



## 活動と成果のポイント

### 1 高密度は種の実践

高密度は種栽培に興味を持つ農業者があり、試験的に実施することとなった。は種量は、一般的な2倍量は種ではなく、1.4倍量は種で育苗した(催芽粉約330ccは種)。

表1 苗質、生育期節の差

処理	草丈 (cm)	葉数 (葉)	第一鞘高 (cm)	乾物重 (g/百本)	生育期節(月日)		
					幼穂形成期	出穂期	成熟期
高密度は種	13.2	3.1	2.8	1.63	7/2	7/28	9/13
慣行は種	14.8	3.5	3.0	2.30	7/2	7/28	9/13
慣行比(%)	89%	88%	93%	71%	生育遅れなし		

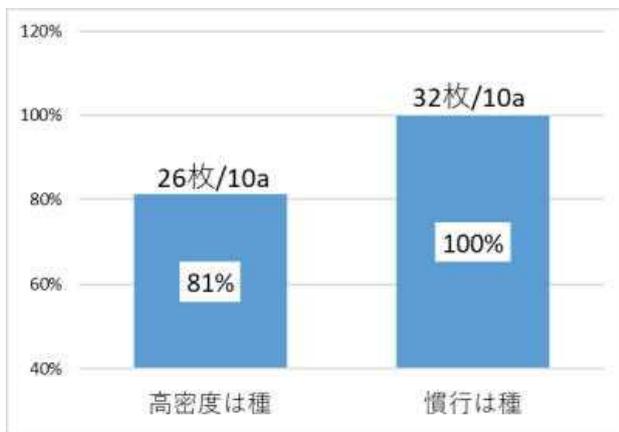


図1 10a当使用箱枚数の差

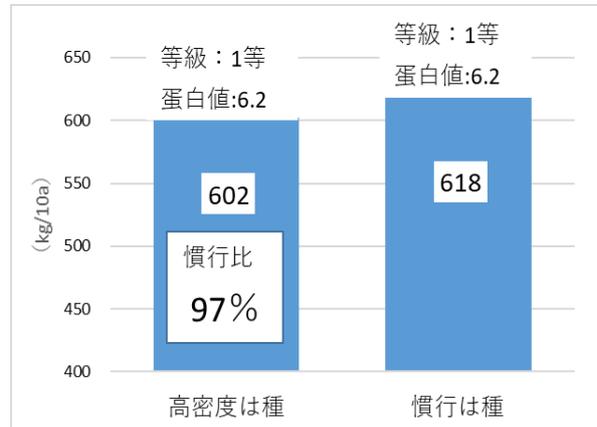


図2 10a当収量の差

**成果 1** 苗素質は慣行苗と比較し、乾物重が約7割となり軟弱傾向苗となったが、その後の生育に差は見らず収量も慣行並みとなった。



写真 1 調査ほ場視察(重点研修会)

**成果 2** 移植についても移植機のかき取り設定(少量かき取り)で約2割の使用箱数の減少につながった。



**農業者の声**  
「次年度は導入を検討したい」

## 2 除草剤散布の省力化 ～少量散布除草剤の提案～

慣行の除草剤は、1 kg/10a使用だが、少量散布除草剤は200g/10aで拡散性に優れているため、散布時間も従来品の20%の時間で散布できる。



写真 2 少量散布除草剤の散布準備

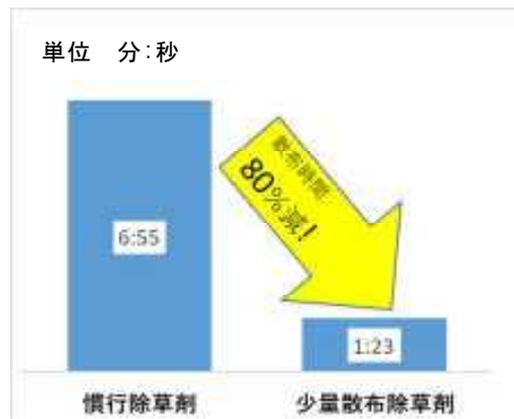


図 3 少量散布除草剤による労働時間の差

**成果 1** 散布布当日は、農業者、関係機関とメーカーも同席し、吐出量の設定や拡散性の話を聞くことができた。

**成果 2** 畦からの散布をしている農業者がいるため、ドローン以外の散布でも作業時間を短縮できることは大きな魅力となる。



**農業者の声**  
「次年度は全ての水田で少量散布除草剤を使用する!」

## 今後の対応

### 1 高密度は種の実践

高密度は種は、苗質が劣ることから生育の遅れが懸念される。このことから、次年度も調査を実施し、安定生産に向けた技術を確立する。

### 2 少量散布除草剤の提案

ドローン及び畦からの手散布での効果確認を行い、省力栽培技術を確立する。

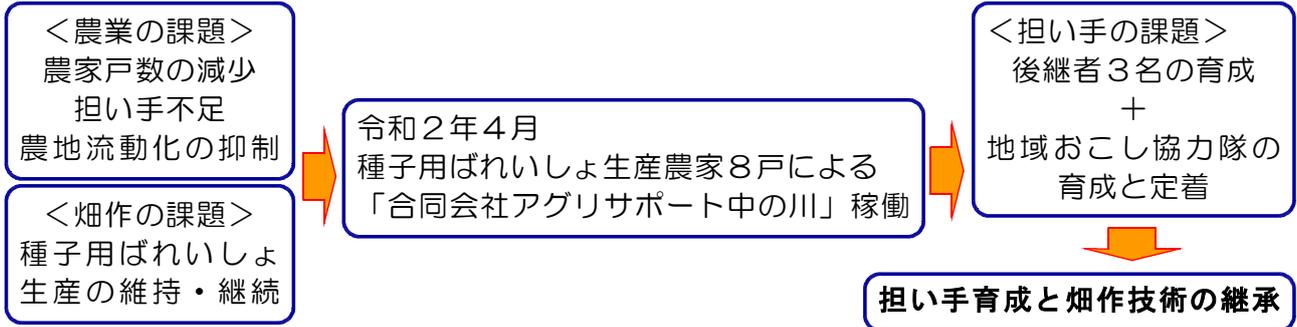
# 地域で守る種子用ばれいしょ生産

～畑作技術の継承と畑作法人の担い手育成支援～

対象：黒松内町合同会社アグリサポート中の川担い手4名

活動期間：令和2～4年度 本所地域第二係

## 活動の背景



## 活動と成果のポイント

### 1 担い手育成を目指した段階的な研修会カリキュラムの作成と開催時の工夫

＜カリキュラム作成時の注意点＞

- ☆法人とJAの意向を汲む
- ☆基本技術＋タイムリーな内容で
- ☆地域のデータを使う
- ☆経営主として必要な知識も加える
- ☆受講生の理解度や要望を加味する

＜飽きない工夫とコロナ禍対応＞

- ☆複数の講義テーマで講師を変える
- ☆演習や実習を多くする（写真1）
- ☆質疑や情報交換の時間を確保する
- ☆休憩時間をとり、換気する
- ☆マスク着用と座席間隔の確保

年度	主な内容
R2	種子用ばれいしょ栽培と防除
R3	畑作物の栽培技術と種子生産、土壌、ワークショップ
R4	病害虫、経営指標、大雨災害・肥料等高騰対策

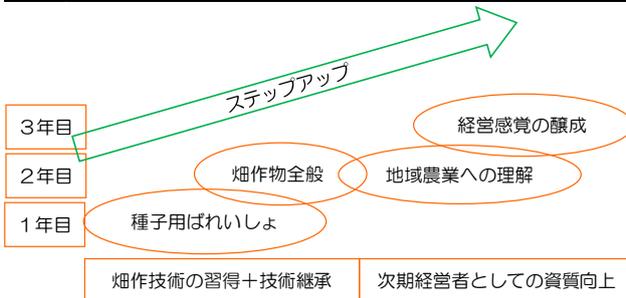


写真1 土性の確認

＜成果＞ 受講生や関係機関などから研修会について好評を得ることができた

#### ＜受講生の声＞

- ・学ぶ場ができて嬉しい
- ・普段、仕事の話をしない仲間との情報交換は勉強になった

#### ＜法人・JAの声＞

- ・講義内容は自分も勉強になった
- ・少人数でも対応してもらい感謝している
- ・受講生の考えを知ることができた

## 2 畑作技術の継承は詳しい人の助けを借りる

＜研修会時の法人代表やJA職員からの技術補足＞  
 ☆土壌特性や気象を踏まえた農作業のコツ  
 ☆農業機械の仕組み  
 ☆効率的・効果的な作業の段取り など

＜法人社員やJA職員からの実践指導＞  
 ☆日々の畑作栽培や管理の実践  
 ☆種子用ばれいしょ病害株の判断  
 ☆畑作物の収穫や選別、出荷など



写真2 地域特性などを話す法人代表

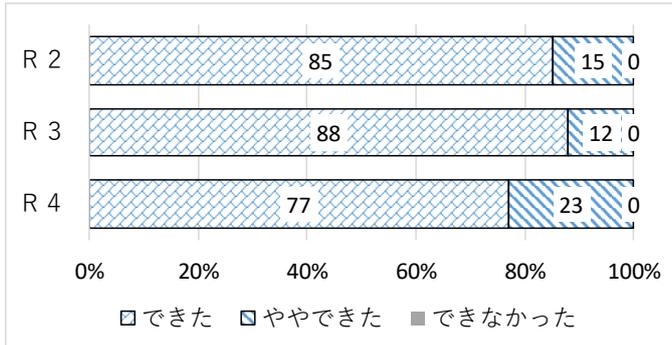


図1 研修会受講者の理解度の推移

＜成果＞ 研修会の理解度は高かった  
 ☆研修会時に行った理解度アンケートでは、「理解できた」と「やや理解できた」をあわせると100%となった

＜研修会受講前後の研修生の変化＞  
 ☆任せられる作業が増えた  
 ☆親や先輩の話しを聞くようになった  
 ☆地域農業の将来を考えるようになった

## 3 担い手育成は関係機関が連携

☆各機関は得意とする分野を担当  
 ☆各機関が連携して担い手育成  
 ☆所内では、広域班と地域班が連携

＜成果＞  
 連携することで、担い手や地域農業など情報共有しやすくなった

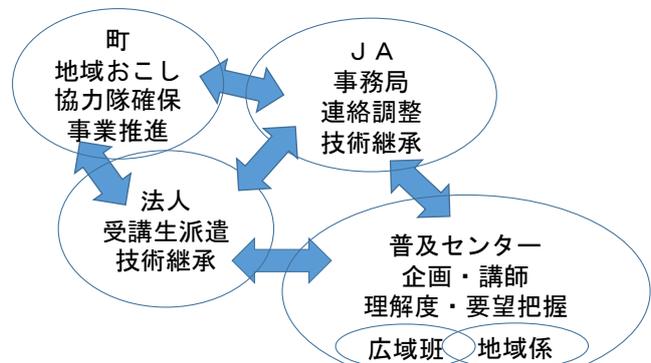


図2 法人及び関係機関と所内連携

### ＜3カ年の成果と今後への要望＞

#### ☆担い手育成

- ・労働面を含めた経営全体を考えるようになった
- ・地域の農地を守る意識が強くなった

#### ☆畑作技術の継承

- ・種子用ばれいしょ病害株の判断ができるようになった
- ・できる作業が増えた

- ・研修会の継続を望む声
- ・さらなるレベルアップを期待する声

## 今後の対応

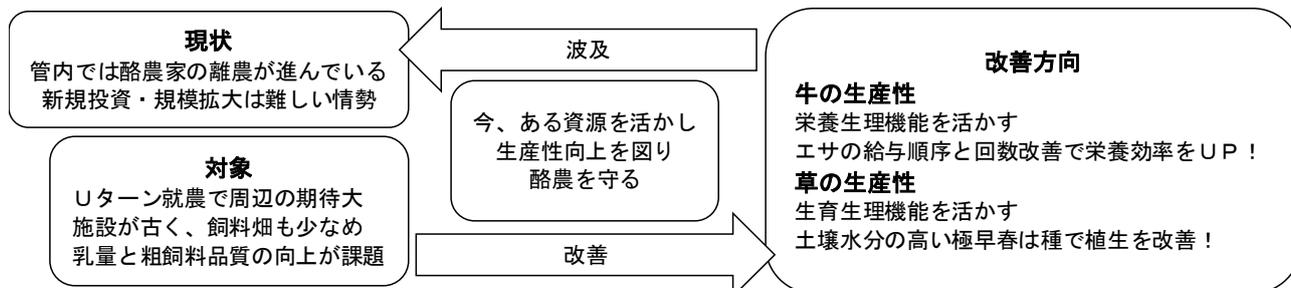
継続への希望があるため、次年度からは、ほ場を中心とした実践的な内容で新たな課題として取り組んでいく。

# 牛・牧草の特性を活かした生産効率の向上

～作業のタイミングを生理機能に合わせる～

対象：JA ようてい 酪農家1戸 活動年次：令和3～4年度 本所地域第二係

## 活動の背景



## 活動と成果のポイント

### 1 1日の飼料給与スケジュールを見直してルーメンの恒常性を保つ

- 飼料の給与順番は、配合飼料 → 粗飼料だったが、粗飼料 → 配合飼料（図1）に変更。
- 配合飼料の回数と給与量は、1日で4kg/回×2回の8kgだったが3kg/回×3回の9kgに変更（図1）。

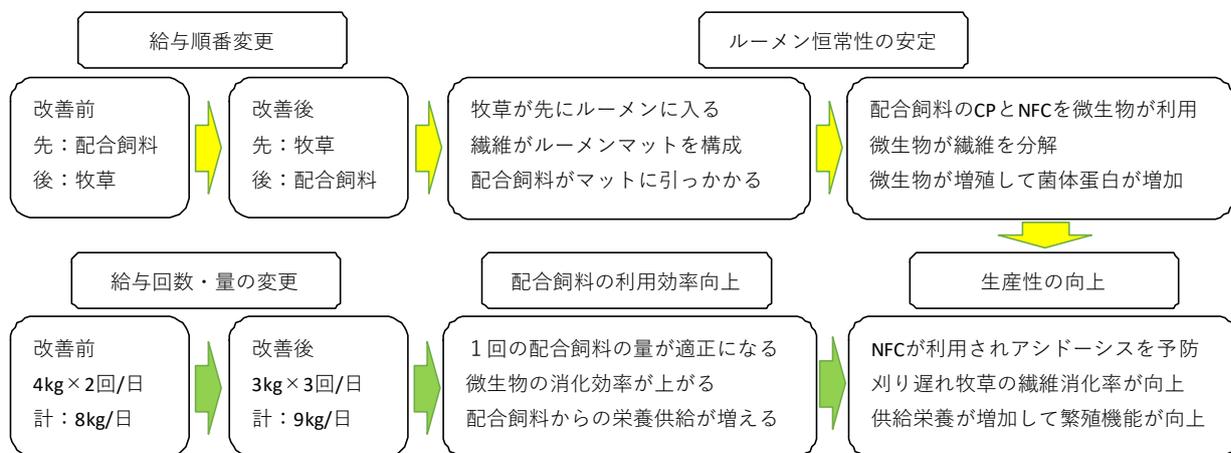


図1 1日の飼料給与スケジュール変更の効果

**成果1** ルーメンが安定することで、夏期間のSNFが下がらなかった。また冬期間の発情発現が良くなった。

農業者の声  
発情が良くなった

### 2 牧草の極早春は種で植生改善を図る

- ギシギシの除草剤処理後は裸地になる（図2、写真1）。
- 採草地の春や秋の追播は、既存植生に飲み込まれやすく技術が確立していない。
- フロストシーディングは、初冬の天候次第で過去に失敗している。
- 雪解け直後の極早春は、土壌水分が豊富で、雑草との競合も少ない（図3）。
- 極早春は草地在が傷むので作業機は、入れない → 人力は種作業。

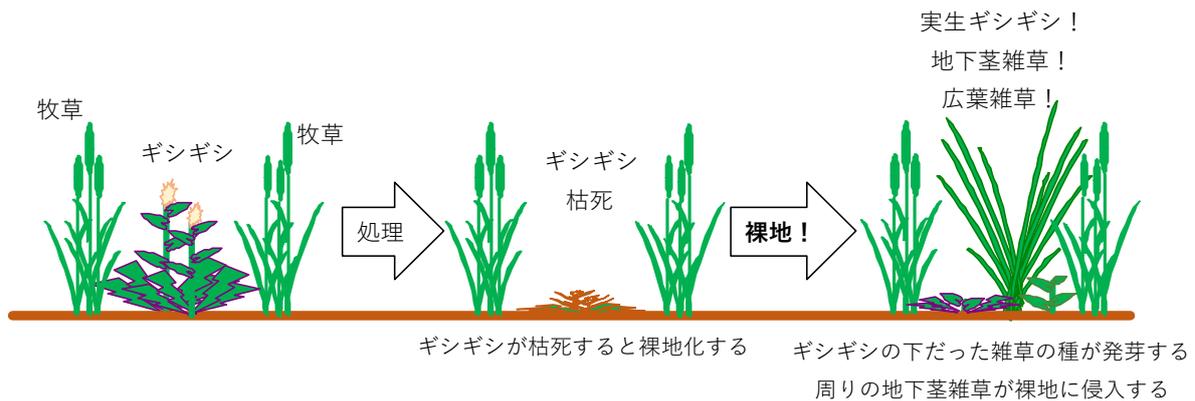


図2 Gishigishiに除草剤をかけても結局雑草が生える

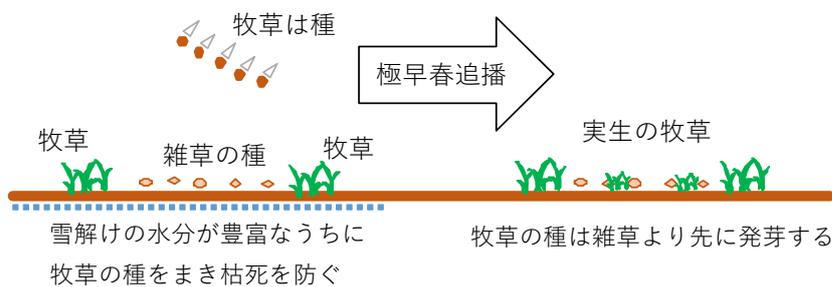


写真1 Gishigishi処理後の裸地、雑草が侵入する (5/12)

図3 雪解け直後（極早春）に牧草の種をまく



写真2 既存植生の中の実生チモシー (7/14)  
穂の高さが違うので見分けがつく

- 試験区は、1番草刈り取り前に実生チモシーの被度が10%になった（写真2）。
- 植生は、2番草でも改善した状態を維持した。
- 実生チモシーは、これから充実するため、被度10%以上の改善が期待できる。
- 秋は、土壌水分が高く、作業機も入れるため同じ内容で追播試験を行った。しかし、実生チモシーが、既存植生に埋もれて枯死した。

**成果2** ①極早春は種により植生改善効果が期待できる。  
②植生が改善することで良質粗飼料の増産が図られた。

農業者の声 チモシー増えたよね～

## 今後の対応

- 1 飼料給与を牛の栄養生理に合わせる
  - 令和5年は、1番草の刈り取り早期化を図り、良質粗飼料を給与する。
  - 栄養成分が、向上した粗飼料に合わせた飼養管理を指導する。
- 2 採草地の植生を改善して良質粗飼料を給与する
  - 粗飼料の良質化と収量の増加が見込まれる。
  - 極早春追播試験は、は種量を増やすなどして継続する。
  - 試験結果は、管内酪農家に報告する。

# 効率的かつ安定的な難防除雑草対策による水稻の安定生産

～農業者のニーズに対応した水稻雑草防除管理の実践～

対象：共和町老古美地域 8戸 活動年次：令和4年度 本所地域第三係

## 活動の背景

### 【現場の実態】

- ・水稻＋畑作部門の複合経営地帯
- ・家族労働を中心とした経営
- ・高齢化や後継者不在の影響
- ・1戸当たり経営拡大  
→担い手への農地集積が進行  
慢性的な労力不足



共和町内の水田で多発し、農業者を悩ませている主な難防除雑草種(左からシズイ、ミズアオイ、オモダカ)

**栽培管理作業の適期実施が困難  
(主に雑草防除対策)**

難防除雑草の発生を抑えきれず、さらに拡大させてしまう

### ＜現場の要望＞

難防除雑草対策を求める声が多い

### 【活動のねらい】

難防除雑草に対する効率的・安定的防除対策

## 活動と成果のポイント

【STEP1 前年ほ場評価に基づく個別改善カルテ+個別巡回で雑草管理の課題と改善策を提案】

I 様

R4年に向けた水田の雑草防除対策の改善(ご提案)

令和4年4月  
後志農業改良普及センター

**R3の雑草防除管理の実態**

・昨年は、代かき～移植まで8日程度を要し、移植から除草剤散布までも10日前後を要したとのことでした。

・昨年は、移植後に低温日照不足であったため、雑草の発生速度が鈍く、除草剤が多少遅れても枯殺できました。

・ただ、移植前後に好天が続くような場合は、除草剤の散布前に雑草の葉齢が進んでしまい、取りこぼす恐れが高いです。このことから、改めて散布日数を見直す必要があります。

・ほ場を拝見すると、雑草は概ね抑制されておりました。一部で残草があったと伺っております。

・たった数株が残草しても、種子生産量は莫大です。特にミズアオイはその厄介な特徴をもっている代表格です。次年度は残草したほ場を中心に手を打つ必要があります。

**R3 8月上旬の雑草発生状況**

雑草種	種子・残草(イモ)生産量
タイヌビエ	約500～2000粒/個体
イヌホタルイ	約1000～3000粒/個体
ミズアオイ	約300～5500粒/個体
オモダカ(残草)	約100～200個/㎡

※ミズアオイの種子は本圃周辺での生産量で目録  
※タイヌビエのイモは本圃での生産量で目録

**R4に向けた具体的な改善策(ご提案)**

①ご提案としては、例えば「ナビエ3薬期」や「ナビエ3.5薬期」までといった、従来の一発剤より殺草限界の葉齢が大きい一発剤を選択するといでしょう。散布が多少遅くとも十分な効果が得られます。

・昨年、岡部さんほ場で試験した「ゼータプラスフロアブル」がこれにあたります。また、値段も2600円程度であり、一発剤の中で最も廉価です。

②薬害を気にして活着するまで長く置くのは、雑草対策上絶対によくありません。現在販売されている剤は、昔のものとは大きく異なり、薬害の恐れは気にする必要はありません。さすがに移植から8日以上空けてしまうと、せっかくの殺草効果を不安定にしてしまいます。

・除草剤の散布は「雑草生育との競走」・「時間との勝負」です。遅くなればなるほど効果が低下しますので、改めてご理解いただきたく存じます。

ご不明な点がございましたら、いつでもご連絡ください  
後志農業改良普及センター



事前にほ場を評価し、雑草対策の課題と問題点をまとめた「個別改善カルテ」を作成

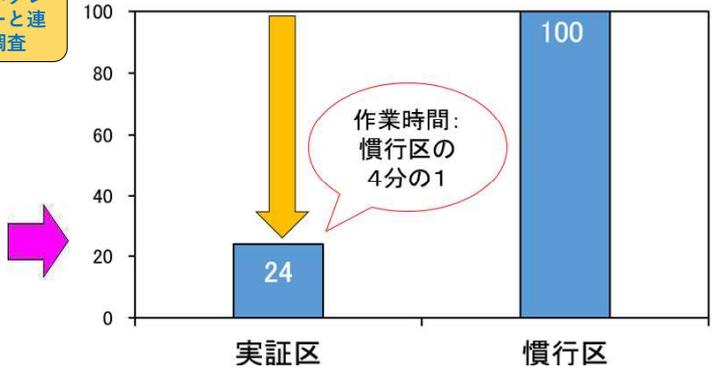
個別巡回時に配布・説明して、課題の提示と問題点に基づく改善策を提案

**成果1 改善点が明確となり農業者の取組意欲が向上**

【STEP2 農業者のニーズに基づいた雑草防除対策の現場実証】



農業者、JA、ホクレン、農薬メーカーと連携して設置・調査



散布時の身体負担軽減を要望する声を受けて高拡散性新規剤の現地実証を行った

高拡散型除草剤の実証試験 (F氏ほ場)

**成果2 農業者自らが実践して高い省力効果を実感**

【STEP3 重点的かつ濃密な支援による防除技術の向上】



難防除雑草に悩む農業者に対して重点的かつ濃密にフォロー

防除効果が安定し、夏場の辛い手取り除草から解放された!

他品目の管理作業に時間や労力を投入できるようになった!

**成果3 他作業への労力投入が可能となり生産性が向上**

【STEP4 ほ場管理状態を評価して、さらなる栽培改善提案】

農業者	移植～除草剤処理	水管理状況	後期剤使用	R4 雑草繁茂状況	点数 (100点満点)	総合評価
A	○～□	○～□	□	○	75	○
C	□	□～△	□	○	56	□
D	○	○～□	□	○	81	○
E	○	○～□	□	○	81	○
F	R3傷病し、R4営農開始に伴う復田で漏水多く評価できず					—
H	□	○～□	□	□～△	50	□
I	□	○～□	□	□	56	□
J	○	○～□	□	○～□	75	□



次年度の改善につなげる

雑草防除管理の取組や雑草発生状況の評価

栽培改善カルテに盛り込み個人面談で提案

今後の対応

- ・難防除雑草対策に課題がある農業者が見られるので、防除安定化に向け支援を継続する。
- ・除草剤散布作業の効率化を実現する防除法を確立する。
- ・他病害虫に対する効果的・効率的防除法を提案・実証する。

# 地域に適したメロン土壌病害虫の防除対策支援

～関係機関との濃密な連携活動による現地実証と盤石支援～

対象：メロン作付農業者 3戸 活動期間：令和4年度 本所地域第三係

## 活動の背景

### 【現場の実態】

- ・共和町は、北海道有数のメロン・すいかの大産地
- ・メロンでは、連作等の影響により土壌病害虫が散見され、生産および収益性に影響を及ぼしている
- ・生産現場では、抵抗性台木や殺線虫剤での対処が主体



共和町内で発生が見られる土壌病害虫の実例



メロン市町村別作付面積(R2)

〔北海道野菜地図(その45)より〕

### 【現場の要望】

生産安定化のため、防除効果のより高い土壌病害虫対策を要望

### 【活動のねらい】

地域に適した土壌病害対策を構築し、収量・品質の高位安定化を図り産地発展を目指す

## 活動と成果のポイント

### 【成果1：JAとの連携による詳細な実態調査に基づいた最適な防除法を提案】



土壌病害虫に悩む農業者との面談とほ場調査の様子

JAと連携して現場の発生実態を詳細に調査し、最適な防除対策法を検討



低濃度エタノールを用いた土壌還元消毒法を選定

### 【成果2：農業者・関係機関との濃密かつ盤石な連携による支援体制の構築】

〔本防除法の現地実証〕

農業者をはじめ関係機関との濃密な連携が成功の“必須条件”





防除法や将来的な到達目標等を各関係機関やメーカー等に説明して協力支援体制の構築を推進

実施に向けた綿密な打ち合わせと役割分担を明確化し現場実証に取り組んだ



農業者と関係機関（農研機構・JA・原子力環境センター）の連携協力による実証ほ設置の様子（7/19, 20）

**【成果3：エビデンスを重視した現場実証とレポートによる進捗状況の情報共有化による不安解消】**

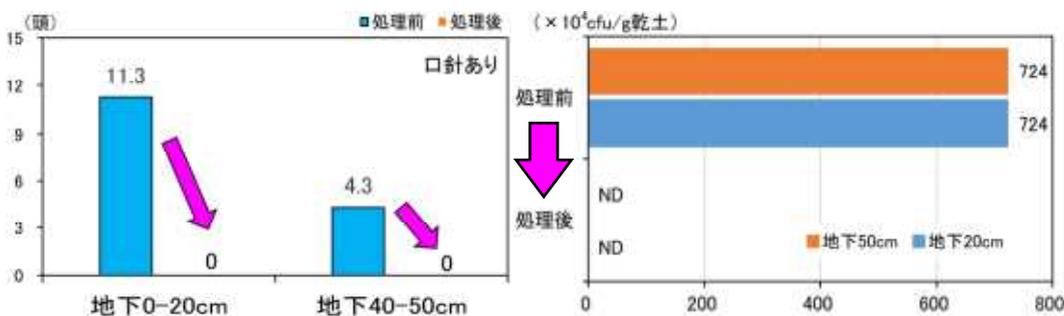


信頼性の高い科学的根拠（エビデンス）を作出・蓄積するため、様々なデータを採取・解析して本消毒法の効果を検証（処理期間中、土壌中に生成される二価鉄、二価マンガンと揮発性有機酸の生成量を測定する様子）



処理の進捗状況や密度低減効果等を、対象の農業者や関係機関と共有を図る（報告レポートの実例）

**【成果4：関係機関との濃密連携による実証成功】**



消毒処理が成功し、*Fusarium*属菌や有害センチュウ類の密度を大幅低減できた

**今後の対応**

- ・本方法の実施導入を要望する農業者を関係機関と連携して支援していく。
- ・現場実施事例を積み重ね、これを基に地域に適した土壌病害虫の防除対策法を体系化したマニュアルの作成を目指す。

# 地域担い手の育成

～将来の留寿都農業を担う若手農業者とともに～

対象：留寿都村五の原地域 10戸 活動年次：令和3～7年度 本所地域第四係

## 活動の背景

### 地域の概要

村内平均作付面積：19ha  
地区平均作付面積：25ha

野菜の面積割合：28%  
根菜類の面積割合：65%

経営主の平均年齢：57才  
20～30才の後継者：6名

### 課題

村内でも作付面積が多い

野菜類、根菜類の作付面積が多い

地域の担い手が多い

### 活動のねらい

#### 【基幹作物の安定生産】

- ・小麦の安定生産
- ・ながいもの安定生産
- ・土壌病害対策の検討

#### 【地域担い手の育成】

- ・**担い手資質向上支援**

## 活動と成果のポイント

### 1 家族、担い手と合意形成と今後の活動を検討



写真1 みんなで集まり興味のあることを検討

担い手の育成は経営主のニーズが高い。

皆で集まっていろいろな話をしませんか？

#### 成果1

- 今後の活動について担い手、家族と合意形成された。
- 学習会の開催など今後の取り組みを話し合った。



写真2 巡回でニーズの聞き取り

### 2 研修会の開催



写真3 ほ場でにんじん葉腐病と適正培土を確認

適正な培土形状を確認できた。次回から実施する。にんじん葉腐病の原因や被害について理解できた。

みんなのてんさい苗を植えてみたら、こんなに生育が違うんだ。



写真4 てんさいの生育を確認

#### 成果2

全員で活動内容等を検討、年間計画を樹立し、研修会を開催した。

### 3 JAと連携しながら活動



写真5 JA担当者も参加しながいも種子予措の研修会

施肥管理によって穂数の増え方が変わることが分かった。

ながいも予措の方法で芽の状況が違うことがわかった。



写真6 小麦の追肥試験ほ場で施肥方法を検討

#### 成果3

地域に展示ほを設置し、JAなど関係機関とも連携しながら解決にあたったため、村内への波及が見られた。

### 4 自己課題の設定



写真7 ながいもの種子を家族で確認

今年の種いもは大きめだが腐敗は少ない。

表1 自己課題の取り組み状況

年度	自己課題	
	設定実施	まとめ
R3	2	2
R4	3	2

\*取り組み農業者数

#### 成果4

自ら課題解決を図ろうとする意識が醸成され、自己課題を設定し取り組みが始まった。

### 5 家族との対話



写真8 今年の計画を確認

催芽がうまくいっているので、ながいもの生育は順調だ。

今年はながいも催芽を検討しましょう。



写真9 経営主へ状況報告

#### 成果5

- 経営主、後継者、普及センターの3者で話をする機会が増えた。
- 経営主が活動を理解し後継者に仕事の一部を任せようとする意識の変化が見られ始めた。

## 今後の対応

#### 基幹作物の安定生産

小麦安定生産 は種、追肥技術の定着  
ながいも安定生産 適正な種いもの予措

#### 地域担い手の育成

担い手資質向上支援  
課題解決に向けた支援  
研修会 ほ場巡回 青空教室  
優良事例調査